

Title	<書評>ワリン・ウォンハンチャオ;池本幸生(編), 『タイの経済政策-歴史・現状・展望-』, アジア経済研究所, 1988, 323p
Author(s)	江崎, 光男
Citation	東南アジア研究 (1989), 26(4): 455-456
Issue Date	1989-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/56350">http://hdl.handle.net/2433/56350</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher



ワリン・ウォンハンチャオ；池本幸生（編）  
『タイの経済政策——歴史・現状・展望——』ア  
ジア経済研究所，1988，323 p.

本書は，アジア経済研究所がアセアン諸国に駐在する研究所職員と各国の研究者・専門家との間で実施した共同研究プロジェクト，すなわち，各国の経済開発とそれに関連する諸問題を研究する「ASEAN等経済開発政策現地研究」事業に対する最初の報告書である。タイに関する本書（ASEAN等現地研究シリーズ No. 1）は1988年3月の出版，フィリピンに関する報告書（同シリーズ No. 2）は同年9月の出版となっている。インドネシアに関する同事業の研究成果は来年度の出版予定とされている。報告書は英語版<sup>1)</sup>と日本語版の2種類ではほぼ同時出版されているが，ここでは，日本語版を対象にして日本語による書評を試みることにする。

タイはNIC（新興工業国）の入口に到達し，NICへの転換的局面を通過しつつある。かつてはタイと並ぶか或いは一步先んじていると思われたフィリピンは，マルコス体制の後遺症を克服し，経済活動を正常な軌道に乗せるべく，今なお多方面の構造調整を必要としている。他方，石油輸出国のインドネシアは，1983年来の長期にわたる原油価格低迷に直面し，非石油部門にリードされた経済発展の道を模索，それに半ば成功しつつあるように見える。このように，タイ・フィリピン・インドネシア各国は，現在，それぞれが独自の，真剣な政策的対応を必要とする局面を経つつある。その意味で，各国の経済発展とそれに関連する諸問題を開発政策の視点から展望し，政策提言を試みることは極めて重要かつ時宜を得た試みである。タイに関する本書の紹介と論評を試みるに先立って，「ASEAN等経済開発政策現地研究」というタイムリーな「共同研究」事業そのものを高く評価しておきたい。

1) Warin Wonghanchao and Yukio Ikemoto (ed.). *Economic Development Policy in Thailand: A Historical Review*. Tokyo: Institute of Developing Economies, 1988, 304 p.

『タイの経済政策——歴史・現状・展望——』は7つの章（執筆者は6人）より構成されており，戦前期の経済政策（第1章，池本幸生），戦後経済成長の概観（第2章，池本幸生），社会・経済開発計画の概要と政策選択（第3章，Wirat Wattanasiritham），タイの通商政策（第4章，Santi Bangor），タイにおける工業化政策（第5章，Mingsarn Santikarn Kaosa-ard），タイの農業開発政策（第6章，Warin Wonghanchao），金融政策の課題（第7章，Siri Ganjarerndee）を主要なトピックとしてカバーしている。以下，結論的な論点に限定しながら各章の内容を紹介しておこう。

1855年の開国から第2次世界大戦までを扱った第1章によれば，この時期の経済政策を特徴づけるのは，自由貿易主義と保守性である。前者は不平等条約によって，後者はイギリス人財政顧問によってもたらされたが，両者とも開明的かつ古典派経済学の信奉者であったモンクット王が自ら選択したという側面をもつ。経済政策の保守性，すなわち，経済開発よりも財政上・対外上の均衡を重視する態度は，戦前に起源を持ち戦後にも受け継がれているという指摘は大変興味深い。中期景気循環の観点から戦後経済成長を概観した第2章では，タイの経済成長も日本の場合と同様，成長率がマイナスになるような不景気はほとんどなく，「成長率が上昇したり下落したりするのみで」タイの「長期成長の過程は，比較的高率かつ安定的であった」という観察（「」は，中村隆英『日本経済——その成長と構造——』からの引用）が印象的である。

第3章から最終第7章に至る5つの章は，タイ戦後期における開発計画，通商政策，工業化政策，農業政策，金融政策について，その概要を整理し，問題点を指摘し，対応する政策的提言を試みたものである。各章はそれぞれの分野で著名なタイ人専門家（評者は5人のうち3人と面識がある）によって書かれており，該当分野に関連する制度的・実務的情報を豊富に含むと同時に，問題点の分析や政策提言も熟読・熟考に値する内容であると思われる。社会・経済開発計画に関しては，成長中心の第1次・2次計画に対し，第3次計画から貧困と所得格差が重大な国内問題となったこと，所得分配の平等化は今なお最優先の課題であること等が最も強調されてい

る。通商政策とそれが密接に関連する工業化政策については、輸入代替型から輸出指向型への移行、タイが NIC に転ずる可能性は工業部門の労働吸収力にかかっていること等が基本的なポイントとして考慮されている。農業開発政策の議論は、第6次計画の最終年（1991年）に対する展望結果をベースに展開されており、多岐にわたる政策提案の前提条件として、国自体の機構改革の必要性が強調されている。最後に、タイ中央銀行スタッフによる金融政策の課題と展望そして実務家的提言から、タイ経済における金融深化の急速な進展状況をまざまざと窺い知ることができる。

本書は、6次にわたる社会・経済計画を軸に、タイ国経済政策の歴史的背景、戦後期の展開、現状と変化の方向をバランスよく理解するのに適した好著である。しいて不満な点をあげるとすれば、財政政策、雇用・労働政策、地域政策など、本書で「直接」取り上げられていないがタイ経済政策の中で重要な位置を占めるとされる政策分野に対する評価と展望であろう。しかし、これらの分野は不完全ながらも関連各章で部分的に言及されているし、重複を避けながら該当章を追加することは必ずしも容易なことではないであろう。本書は、転換期にあるタイ経済の問題点を理解し将来あるべき姿を考える上で、1つの基本的な出発点を与えていると評価しておきたい。なお、編者は、タイの経済政策の特徴として「安定指向」を1つの重要なポイントと考えているように思われるが、この点については評者も全く同感である。評者もタイの経済発展を *slow but steady* と考えている。ただし、*slow* は東アジア NICs と比較しての話である。

(江崎光男・東南ア研)

Melanie Beresford. *Vietnam: Politics, Economics and Society*. London: Pinter Publishers, 1988, xxi+242 p.

This is one of the books which have been published in Marxist Regimes Series with Bogdan Szajkowski as general editor. The scholars on Southeast Asia might find the books on Laos

and Kampuchea also interesting.

Beresford's book on Vietnam give a good introduction to the country for social scientists interested in contemporary Vietnam. It consists of five parts (history and political traditions; the social system; the political system; the economy; and the regime's policies) and gives the roughly same weight to each of these parts (though the part on the social system is somewhat shorter). In general, the book is well written and documented. For those who are interested in further reading, there is a bibliography at the end of the volume. Since writings on Vietnam are scattered and many of these were written in relation to American involvement in Vietnam, it had been difficult to get a detached view of contemporary Vietnam before this book appeared. Before a similar book appears, it will serve as the introductory text to contemporary Vietnam.

To write a good introductory book on a country is difficult. First, the author has to be familiar with the literature and has to have necessary factual data. For countries like Vietnam on which information is scanty, to obtain relevant factual information alone is a difficult task. But a good introductory text has to go beyond that. The author has to have either a theoretical framework or a comparative framework to process his information. Otherwise, the book ends up as a fact book, and fails to give insight to the structure, processes, and problems of the country.

Ms. Beresford must have been in contact with scholars interested in other socialist regimes or communist movements in other countries, for here and there, she throws in comparative analyses. But some of her comparative analyses are weak. For example, in discussing why the communist movement succeeded in Vietnam but failed in Thailand (pp. 209-210), she brushes aside the fact that Thailand was an independent